

# 看護における他者とコミュニケーションを もつことの意義

—V. ヘンダーソンの基本的欲求の概念と  
Sr. C. ロイの適応行動様式 of the Conceptを通して—

島田 壽美子<sup>1)</sup>

## Significance of the others communicate in nursing —Concept of the Basic Needs of V. Henderson and Concept of the Adaptive Modes of Sr. C. Roy—

SHIMADA Sumiko

### 要 旨

V. ヘンダーソンの10番目の基本的欲求と、ロイの「相互依存」の適応行動様式との関連を論及し、この2つの異なる理論の背景から看護におけるコミュニケーションの意義を考察した。V. ヘンダーソンの10番目「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”)」の基本的欲求を原語より概念規定を行ったところ、「自己表出ニードによる相互依存成立欲求」と定義することができた。この概念定義を基に、ロイの適応様式の「相互依存」と他者とコミュニケーションする目的との関連を論及した。その結果「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現」する概念は「自己表出ニード」が充足されることと同義であり、「相互依存」の成立は、愛情が充足されることであることが示唆された。したがって、看護者は、相互依存関係の成立を目的に、患者とのコミュニケーションに真摯に向き合っていくことが大切であることが明確になった。

キーワード：コミュニケーション

基本的欲求

適応

相互依存

1) 健康科学大学 看護学部設置準備室

## I はじめに

コミュニケーションは、ラテン語を語源とする言葉で、「伝える」、「分かち合う」、「共有する」という意味があり、人（話し手）と人（受け手）とのメッセージ交換、感情の交流など、基本的には両者間の相互作用が基本となっている。

V.ヘンダーソン（以下ヘンダーソンという）は「看護の基本となるもの」(Basic Principles of Nursing Care, 1960)において、人間の基本的欲求に対して行われる基本的看護こそ看護独自の機能であることを強調した<sup>1)</sup>。そして、基本的欲求の未充足状態アセスメントと、基本的看護の実践方法との関連に言及し、実践を導く理論を確立させている。その中の10番目の基本的欲求である「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”）」は、特に看護師が行うコミュニケーションの目的の意義について述べていると考える。

一方、看護理論家の Sr. C.ロイ（以下ロイという）は「ロイ適応看護モデル序説」において、人間は「環境によって取り囲まれた全体的適応システム」と定義し、「適応は対処を必要とする特定の刺激への反応を減らし、他の刺激に反応できる感性を高めるという方法で、環境の変化に肯定的に応答していくプロセスである」と述べている<sup>2)</sup>。そして、環境は「個人や集団を取り巻き、その発達や行動に影響を与える条件、境遇や影響物すべて」をさし、それに対応する人間の適応していく行動様式として、「生理的様式・自己概念・役割機能・相互依存」の4つを導き出している<sup>3)</sup>。特に、相互依存の行動様式は人の心理社会的統合様式を示して、心理社会的看護の何たるかを明確にしている。

ロイの「相互依存」の適応行動様式は、ヘンダーソンの述べている基本的欲求10番目の「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”）」欲求と同じ概念を規定しているものと考ええる。

そこで、ヘンダーソンの10番目の基本的欲求の概念規定を行い、ロイの「相互依存」の適応行動様式との関連を論及し、この2つの異なる理論の背景から看護におけるコミュニケーションの意義を考察する。

## II 本 論

- 1 「10. 自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」 基本的欲求 (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”) とは；概念定義
- 1) 「communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”」原語から

(1) 「communicate」「expressing」「emotions・needs・fears・“feelings”」の和訳とそれらの関係

ヘンダーソンは人間の基本的欲求の第10番目に「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」(10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”) という欲求を挙げた。この欲求の原語表現から構成される重要原語は、「communicate」「expressing」「emotions・needs・fears・“feelings”」となる。第一に重要となる「communicate」の原語の語源をたどると、ラテン語のコミュニカーレ (communicare : 共有する) やコムニス (communis 共有の) と、共有の意味を持つことがわかる。

従って、「communicate」は、単に人と人との間で、「聞く、話す」ではなく、「相互作用のプロセスにおいて共有すること」を強調していると考えられる。つまり、これらの言語構成は「communicate (共有する)」ためには、「emotions,・needs,・fears,・“feelings”」を「expressing」することを意味しているといえる。次に、「expressing」は、「気持ちなどを表現する」と和訳できる。気持ちとは、どのような気持か。ヘンダーソンの答えは、「emotions・needs・fears・“feelings”」の4つの気持ちの表現を重視しているといえる。ヘンダーソンが重視した communicate の欲求とは、次のように捉えることができる。

「emotions・needs・fears・“feelings”」の4つの気持ちを抱いた人が、その気持ちを他者に「expressing (表現する)」ことにより、気持ちを抱いた人が、他者と気持ちを「communicate (共有する)」することができ、共有したことで気持ちが安らぐことができる欲求である。

(2) 「emotions・needs・fears・“feelings”」の概念

① 「emotions・needs・fears・“feelings”」の英訳及び和訳

各々の言語を英訳すると次のようになる。それを著者が ( ) 内に和訳した。

emotions : strong feelings (激しい感情)  
 needs : a thing that is wanted or required. (必要あるいは願望している欲求)  
 fears : an unpleasant emotion caused by the threat of danger, pain, or harm. (危険や苦痛、加害などの場面や状況から引き起こされる不快な強い感情)  
           : a feeling of anxiety concerning the outcome of something or the safety of someone. (安全が脅かされることで不安になる感情)  
 feelings : an emotional state or reaction. (激しい感情の状態あるいは反応)

② 英訳・和訳から抽出される “feelings” の概念

「needs」を除いた「emotions・fears・feelings」の3つの言葉の英訳に共通している事は、「emotion」と「feeling」の感情を表現する言葉である。故に、「emotions・fears・feelings」の和訳は、「感情」の状態と表現できるのではないかと考える。

一方、「needs」はどうだろうか。「needs」は「a thing that is wanted or required.」

と英訳できる。英和辞典を参考にして「want」は「必要としている事」、「required.」を「願望する事」と意識した。哲学者のスピノザ (Spinoza, B. de) は、感情について「喜び、悲嘆、願望」の3つの状態をあげ、すべての感情はこれから生じると述べている。従って、「needs」に含まれる「願望」も、「感情」の一部と捉えることができる。

また、「看護学大辞典」による感情の分類は、「一般的な喜怒哀楽の4分法のほか、恐怖、怒り、悲しみ、嫌悪、恥、驚き、興味、幸福の8分法 (Buck, 1988) などさまざまなものがあるが、これらがすべての感情をいい尽くしているわけではなく、感情のなかには言語では、表現しがたい未分化で不定型なものが多い<sup>3)</sup>」としている。これまで「needs」の「必要としている事」の意識は、感情の分類に入れ難かった。しかし、看護学辞典の感情の分類では、「感情のなかには言語では、表現し難い未分化の感情」も無限にあるとしている。つまり、看護で重要視しなければならない「必要としている事」の意識は、「言語では表現し難い未分化の不定形な感情」であり、それらの多くが感情の一部であるといえることである。更に「看護学大辞典」では、「感情 (feeling)」も「人の心理過程」としてとらえ、feeling と表現している。

以上から、「emotions・needs・fears・feelings」の全てに共通して言える事は、「全ての感情を言葉や体を通して表現する」ことであり、「感情」の意味は、「言語では表現しがたい無限な心的状況」であると捉えることができる。

そして、ヘンダーソンは、(10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”)(原文 p. 89) の表現で、「emotions, needs, fears, or “feelings”」の四つの感情のなかでも“feelings”に、“ ”マークを付し強調している。この強調は、「人の心理過程」に共通して表れる「感情」を「言語では、表現しがたい未分化で不定型なもので無限にある感情」として大切にしたい結果と考えられる。しかも、看護場面では、表現し難い未分化で不定形な感情に、最も注目しなければならない。従って、それが、“ ”マークで強調されていると考える。

一方、原文では、基本的看護の「機能 (function)」として、第10番目の欲求を、「Communicate with others in expressing emotions, needs, fears, etc.<sup>4)</sup>」と表現している。ここでは、「“feelings”」を「etc.」に置き換えている。ヘンダーソンが、「etc.」に置き換えた意味は、人間の感情を4つ例示することから、感情の無限性を考えて、「“feelings”」を「etc.」にしたものと解釈できる。更に、ヘンダーソンは、感情を「expressing (表現する)」ことが、「communicate (共有する)」の基本とした。ここからも、感情の表現こそコミュニケーションの基本であると結論づけられる。

ところで、湯 檜、小玉は、「(10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”)<sup>5)</sup>」を「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」と訳し、さらに“feelings”のみに“ ”をつけ“気分”と訳し強調している。しかし、筆者は、英語の語源・英英訳・英和訳にあたり、更にヘンダーソンの原著に戻って、4つの語訳と概念に論及を試み、その結果、「feelings」は、全ての感情の総称で、単に「気分」に留まらない方が、適切とした。

その理由は、個別な人間のその時・その場・その状況下での、その人の感情は無限で、看護は、無限の感情こそ大切にしなければならないと考えたからである。

以上の原語の概念から考えられる第10番目の欲求を、筆者は次のように捉えた。

10番目の基本的欲求は、単に「feelings (気分)」に留まらない、「『無現にある感情の中の気持ち』を『expressing (表現する)』ことにより、その気持ちを抱いた人が、他者と気持ちを『communicate (共有する)』することにより、共有したことで気持ちが安らぐことができる欲求」である。

## 2) 「看護の基本となるもの」の基本的看護の構成要素の意義から

ヘンダーソンは『看護の基本となるもの』第Ⅳ章基本的看護の構成要素の第10項で「自分の感情、欲求、恐怖あるいは“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ (10. communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”)」の基本的欲求に対応する基本的看護を次の様に表現している。

「患者が他者に意思を伝達し、自分の欲求や気持ちを表現するのを助ける (Helping Patient Communicate with Others – to Express Needs and Feelings)」<sup>6)</sup>である。

そして、ヘンダーソンはその文中で他者とコミュニケーションをもつことの意義について、次のように述べている。

「人間は、皆、自分の考え、感情、願望を得心のゆくように身体上に表現することを求めており、またこの自己中心的あり方を越えて成長した範囲内で、この意味での他者の幸福を求めている<sup>7)</sup>。原文によると次の様に表現されている「All human beings are seeking satisfying physical expressions in their thought, emotions and desires, and to the extent that have developed beyond this egocentricity, they also seek the happiness of others.」<sup>8)</sup>。

上記の訳文からヘンダーソンは、人間の基本的欲求を「人間は、自分の考え、感情、願望を得心のゆくように身体上に表現することを求めている」事と、「この自己中心的あり方を越えて成長した範囲内で、この意味での他者の幸福を求めている」事の2つの側面に関して述べている。

前者の、「人間は、皆、自分の考え、感情、願望を得心のゆくよう身体上に表現することを求めている」という欲求の本質は、前項1)の原語の概念から考えたように、「無限にある感情の中の気持ち」を「expressing (表現する)」ことである。

後者の、「この自己中心的あり方を越えて成長した範囲内で、この意味での他者の幸福を求めている」欲求は、「その気持ちを抱いた人が、他者と気持ちを『communicate (共有する)』することができ、共有したことで気持ちが安らぐことができる」欲求といえる。

すなわち、自分の気持ちを表現することで、他者と意思が通じ合う関係になり、支持を得たり、安心感を得ることで、お互いに共有しあう相互作用により、自分自身を成長させたり危機を乗り切ったりすることにつながることといえる。

従って、10番目の基本的看護は「患者が他者と適切にコミュニケーションし、自分の気持ちを表現するのを『助ける』」ことといえる。看護師の“助ける”部分を除去し、基本的欲求に直すと「患者が他者と適切にコミュニケーションし、自分の気持ちを表現する」欲求の表現になる。

金子は、ヘンダーソンの第10番目の基本的欲求を「自己表出のニード」<sup>9)</sup>と略している。「自分の気持ちを表現する」ことは自己表出である。そこで筆者も「自己表出ニード」という言葉に置き換えて表現したい。

### 3) 「自己表出ニード」と「他者とコミュニケーションをもつ欲求」概念の統合

人は、人との相互プロセスにおいてお互いを理解し、意思や感情を伝えあうことで心地よい生活へとつながる。また、悩み事や困りごとがある時、その事を胸の内にかかえているより誰かに聞いてもらうことにより気持ちが晴れる。10番目の「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”）」基本的欲求が充足されることは、前項の1)と2)の概念定義の中で述べたように自己表出のニードが充足され、気持ちの共有が成立し人と人との親密な関係につながることである。

この状況は、人間が持つ適応様式に視点を当てて、適応状態の促進と非効果的応答の適応レベル向上に寄与する看護論を展開したロイが示す相互依存 (Interdependence) につながると考える。ロイは行動様式の一つである相互依存 (Interdependence) を、人と人の親密な関係と定義し、親密な関係とは、他者を愛し、尊敬し、その価値を認めると同時に、他者からの愛と尊敬と価値観を受け入れることで、他者との親密な関係が保持されることと述べている。この相互依存行動様式の基礎にあるのは、愛情充足ニードである。愛情を充足する人と充足される人とのニードが相互に適応していると、相互依存が成立する。

ヘンダーソンの自己表出によるコミュニケーションの成立は、自己表出のニードが充足され、気持ちの共有が成立し人と人との親密な関係につながることである。また、ロイの「相互依存」も人と人の親密な関係と定義され、愛情を充足する人と充足される人とのニードが相互に適応し、相互依存が成立する行動様式である。

従って、第10番目の「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」欲求 (10, communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”) の概念は、ロイの相互依存の概念につながるといえる。

以上のことをふまえて筆者は「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」欲求を次のように定義した。

「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」ことは、「自分のもつ無限にある感情を自己表出することで、愛情が充足され相互依存が成立する」ことである。

さらにそれを抽象するならば、「自己の感情の表出に従って、相互依存が成立する欲求」と言える。

加えて、ヘンダーソンの語原的概念を加味、考察して第10番目の基本的欲求は、ここでは「自己表出ニードによる相互依存成立欲求」と同義とする。

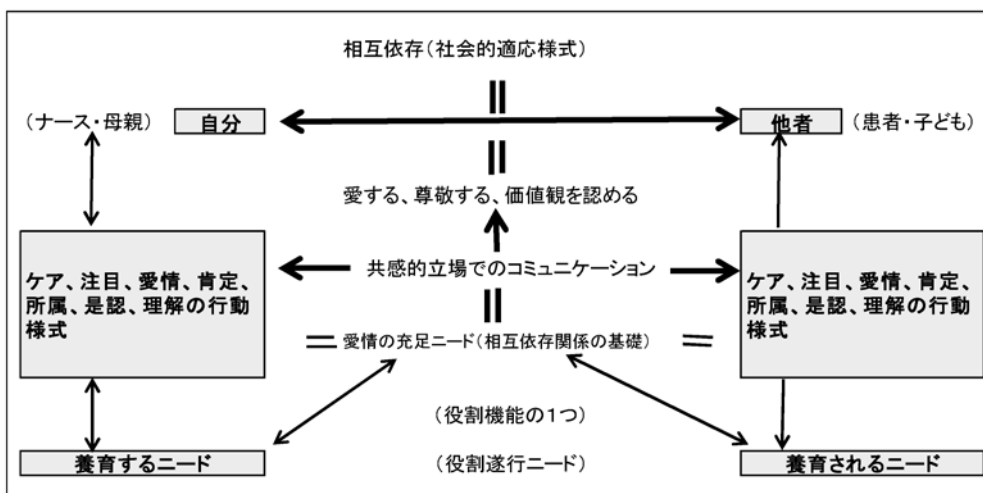
## 2 「10. 自分の感情、欲求、恐怖あるいは“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」基本的欲求の概念にみる適応行動様式

### 1) 「自己表出ニード」から成立する「相互依存性」

第10番目の基本的欲求の「自己表出ニード」は、「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現」することであり、無限にある感情を自己表出し、他者とコミュニケーションをもつことで成立する基本的欲求であると筆者は定義した。無限にある「自己表出のニード」の充足方法は、文化によって違いがある。アメリカは多民族国家で価値の多様性があり、自己主張しないと相手に理解してもらえないという文化である。日本は、すべてを言語化しなくても、思いやり、相手の言いたいことを察知し、それに応えるという察知の文化である。「言わなくても解ってくれるだろう」という暗黙の了解が会話の形である。したがって「自己表出ニード」の表出の違いは文化によって異なるが、「無限にある感情を自己表出する」ことは万国共通である。ゆえに、「自己表出ニード」の充足方法に違いはあるが、「無限にある感情を自己表出し他者とコミュニケーションをもつ」ことで基本的欲求の充足につながるといえる。

筆者は「他者とコミュニケーションをもつ」欲求が充足することは、「『無限にある感情の中の気持ち』を『expressing (表現する)』ことにより、その気持ちを抱いた人が、他者と気持ちを『communicate (共有する)』することができ、共有したことで気持ちが安らぐことができる」基本的欲求とした。他者と「気持ちを共有する」ことの「共有」とは、広辞苑によれば「一つの物を二人以上が共同で持つこと」である。気持ちの共有とは、無限にある感情の中の気持ちが表現されたことにより、その気持ちを抱いた人が、二人以上の他者と気持ちを共有することができ、共有したことで気持ちが安らぐことができる欲求であるといえる。つまり、お互いに共有しあう相互作用により、お互いに自分自身を成長させたり危機を乗り越えたりすることにつながる相互依存の成立につながる。

ロイは、相互依存の行動様式の中心概念に「愛情充足ニード」をおいている。愛情充足ニードは「養育するニード」と「養育されるニード」との両者から成立するニードである。この両方の関係は、母子関係の相互作用にみられる関係で説明できる。「養育するニード」と「養育されるニード」は、互恵的で相補的である。例えば、乳児は空腹の時、おむつが濡れた時、痛みがある時など泣いて訴える。母親は、無償の愛によりその状況を察知し、授乳したり、おむつを変えたり、痛いところを探して、撫でたりするこ



金子道子 (2000) 看護論と看護過程の展開. 照林社を著者が一部改編

図1 「他者とコミュニケーションをもつ欲求」と相互依存の定義と愛情ニードとの関係

とにより、乳児の不快感は解消され、泣き止み、母親に微笑んだりして母親にとっての癒しのサインを送る。この母と子の関係こそが、「養育するニード」と「養育されるニード」の関係であり、「相互依存」行動様式である（図1）。これらの母子関係の例が、ロイの相互依存行動様式の成立で「愛情充足」が満たされた結果である。

従って、「自己表出ニード」から成立する「相互依存性」は、ロイの相互依存の定義を加味し言及して、「自分のもつ無限にある感情を自己表出するニードにより、相互依存が成立し愛情が充足される」ことと同義であるといえる。

### 3 「自己表出ニードによる相互依存成立欲求」と看護

日本看護協会は、「看護とは、健康のあらゆるレベルにおいて個人が健康的に日常生活ができるよう援助すること」（日本看護協会，1973）と看護を定義している。そのため看護に求められていることは、健康問題に対する人間の反応の診断を行うための情報収集が不可欠であり、的確な情報を得るためには専門職としてのコミュニケーションスキルが必要となる。

ヘンダーソンの「第10番目の基本的欲求」とロイの「相互依存行動様式」は、「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現」する「自己表出ニード」が充足され、相互依存の成立により愛情が充足される関係である。看護の場面では、患者が何らかの障害で「他者と適切にコミュニケーションし、自分の気持ちを表現できない」基本的欲求の未充足となる場面がある。このようなアセスメントの場合は、「表現できるような環境を支援する」ことが充足につながることはもちろんである。また、例えば、がん患者の多くはうつ状態になるなどの報告がある<sup>10)</sup>。このような状態になった時、看護師のコミュニケーションスキルは重要な役割を果たすことになる。看護者が、患者のコミュニケーションに真摯に向き合い、患者から発せられるメッセージを上手に受け取り、



フィードバックしていくことにより相互依存関係が成立し、患者と看護者の信頼関係が築かれ不安の軽減につながっていくことも考えられるからである。このようなコミュニケーション場面は、臨床でよく出会うことでもある。

したがって、ヘンダーソンとロイの理論を基に患者一人ひとりの状態にあったコミュニケーションを持つことで、人（話し手）と人（受け手）とのメッセージ交換、感情の交流などが成立し、両者間の相互作用につながる事が明確になった。

### Ⅲ 結 論

- 1 「10. 自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現して他者とコミュニケーションをもつ」基本的欲求の概念定義は、概念構成と原語の意味的要約から、「自分のもつ無限にある感情を自己表出することで、愛情が充足され相互依存が成立する」ことであるので、「自己の感情の表出に従って、相互依存が成立する欲求」と定義できる。さらに、それを抽象化し「自己表出ニードによる相互依存成立欲求」と命名した。
- 2 「自己表出ニードによる相互依存成立欲求」は「共感」的立場でコミュニケーションすることにより、その結果として、愛情充足ニードが充足され相互依存関係が成立する。相互依存行動様式そのものであると言える。
- 3 ヘンダーソンの「第10番目の基本的欲求」とロイの「相互依存行動様式」は、「自分の感情、欲求、恐怖あるいは、“気分”を表現」する「自己表出ニード」が充足され、相互依存の成立により愛情が充足される関係である。ヘンダーソンとロイの理論を基に患者一人ひとりの状態にあったコミュニケーションを持つことで、人（話し手）と人（受け手）とのメッセージ交換、感情の交流などが成立し、両者間の相互作用につながる事が明確になった。

### 引用文献

- 1) V. ヘンダーソン著, 湯楨ます, 小玉香津子訳, 「看護の基本となるもの」, 日本看護協会出版会, 2009, p17
- 2) Sr. C. Roy 著, 松木監訳, 「ロイ適応看護モデル序説」(原著第2版, 邦訳第2版), へるす出版, 1995, p28
- 3) 看護学大辞典, 医学書院
- 4) V. Henderson 「Basic Principle of Nursing Care」Revised 1997 ICN p35
- 5) 前掲書4) p89
- 6) 前掲書4) p72
- 7) 前掲書1) p62
- 8) 前掲書4) p73
- 9) 金子道子編著, 「看護論と看護過程の展開」, 照林社, 2000, p34
- 10) 上野栄一, 森本久美子, 鳥田葉子, 他1名 (1996), セミクリーンルーム入室患者と多床室患者のうつ

## 参考文献

---

- 1 谷栄司, 「未完のヴィゴツキー理論 甦る心理学のスピノザ」, 三学出版, 2010008

## Abstract

I mentioned the related between the tenth “basic needs” of V. Henderson and Roy’s “interdependence” the Adaptive Modes, I discussed the significance of communication in nursing from the two different theoretical background. When that was done concept defined than the original language the tenth basic needs (communicate with others in expressing emotions, needs, fears, or “feelings”), I could be defined as “Need that interdependence is established by Self-expressive need”. Based on this conceptual definition, the relation of “interdependence” of the consistent format of Roy and the purpose of communication was mentioned. “Expressing emotions, needs, fears, or feelings” and “Self-expressive need” was synonymous. It was suggested that it was (Expressing emotions, needs, fears, or “feelings”), and be a relation to which “Self-expressive need” was synonymous, and “affectional adequacy” by the approval of “interdependence”. Therefore, Nursing aims to “interdependence”. Nursing who listen to talk of the patient. Nurses it is important to face very seriously and patient.

Key words : Communication

Basic needs

Adaptation

Interdependence